

説教『裁く者が裁かれる』ルカによる福音書 23:1-25 2017年2月5日

今日の聖書の箇所には悪者として知られる二人の人物が出てきます。ローマ総督ピラトとユダヤの王ヘロデです。けれども彼らは一方的に悪者と決めつけて描かれているのではありません。確かに彼らはイエス処刑の決定権を持っていたのですが、イエス様のまなざしの中では、そして天の神様のまなざしの中では、悪者と断罪するのとは少し違った見方がされているのです。そして彼らに向けられたまなざしは、私たち自身にも向けられているものです。今日はこの二人の姿を通して、神様が私たちをどのように見ておられるのかを学びたいと思います。

まずピラトについて見てみましょう。イエス様は、最高法院で有罪の判決をうけたのち、ピラトのもとにつれてこられます。死刑のような重罪犯の場合、ローマ総督による最終審が必要だったからです。罪状はローマに反抗し「ユダヤの王」を名乗ったということでした。そこでピラトは、「お前がユダヤ人の王なのか」と尋ねます。するとイエス様は「それは、あなたが言っていることです」と返事をされました。実はこれは前の最高法院で祭司長たちに答えたのと同じ答えです。ユダヤの支配者たちは心の深みでイエスが神の子であると知っていながらそれを否認しているという事実をイエスは突きつけたのでした。この同じ言葉を異邦人であるピラトに語ったということはある意味驚きです。つまりユダヤ人だけが神を認識できるのではなく、異邦人も、つまり人間であればだれでもが、神様がわかるということ。ピラトにそれが分かったのかどうかは明記されていませんが、イエスが正しい人であることを即座に認識し、「わたしはこの男に何の罪も見いだせない」と言いました。

それでも人々はイエスを反逆罪で訴え続けます。「この男は、ガリラヤを出発点に全国を行脚し、エルサレムまで来て、民衆を扇動しているのです。」これを聞いたピラトは一計を思いつきました。おりよくガリラヤを支配していたヘロデ王がエルサレムに滞在中だったので、「なに、その男はガリラヤ出身なのか？それではヘロデの裁判を受けるべきだ。」と、うまくヘロデにたらいまわし…ができたと思いきや、ヘロデも、無罪も無罪、お話にならないとんだ道化だとして、返してよこしました。その後ピラトは何度も無罪を言い渡します。面白いですね、この場面でイエスを懸命に弁護しているのはピラトなのです。なにしろピラトは一生懸命です。そこで譲歩して、ならば鞭打ち刑にしてはどうだ？それでも民衆は聞きません。「十字架につける、十字架につける」と大合唱になります。それでもピラトはイエスを守ろうとします。「いったいどんな悪事を働いたというのか。この男には死刑に当たる犯罪は何も見つからなかった。だから、鞭で懲らしめて釈放しよう。」三度目の弁護です。

それでも十字架刑を要求する声は収まりません。イエスを弱者と見るや、民衆は、失望感と怒りから徹底的にイエスを糾弾します。弱者をいじめるスケープゴートの心理、私たちの中にもあるものです。この群集心理に圧倒され、とうとうピラトは死刑宣告をしてしまいます。ピラトは正義を行おうと一生懸命なのですが、ついに彼の正義感は潰されてしまいました。皆さん、ここで思いを向けていただきたいのは、受難物語の中で、勇敢にもイエスを弁護し救おうと努力した人は、ただ一人ピラトだけだったということです。ここで描かれるピラトはただの悪人ではなく、正義を行おうとして必死になり挫折した人物だということです。

もう一人の人物、ヘロデを見てみましょう。この福音書には、ヘロデは以前から登場していました。ヘロデは、イエスの先駆者バプテスマのヨハネを処刑しました。民衆はイエスをヨハネの再来と噂していたものですから、彼はイエスに興味を持ち、そして後には殺意を抱いたの

です。ピラトから送検されてきたイエスと会ったとき、ヘロデは喜び、さんざんに侮辱しました。イエスを見世物か大道芸人のように扱い、自分の王衣をまとわせてピラトに送り返したのです。彼はイエスに偉大な業を予想したのかもしれませんが。そして自分の業と比べたかったのかもしれませんが。彼はエルサレム神殿を建てた王でしたから。どちらが偉いのかという訳です。とてもお話になりませんでした。差は歴然としています。イエスへの警戒心と殺意は消えてしまいました。

けれども実は、ヘロデが誇る神殿は、西暦 70 年のユダヤ戦争で崩壊し、見捨てられてしまう運命にあったのです(13:35)。このことをイエス様は、以前ヘロデの殺意を耳にしたときに、預言されました。そして、とても嘆いて、「めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか」と言われました(ルカ 13:31-35)。詩編には、神様の翼の下で守ってください、という祈りがたくさん出てきます(詩 17:8、36:8、57:2、61:5、63:8、91:4)。イエス様は、自分を殺そうとするヘロデに対しても、愛の手を差し伸べようとしてこられたと、この時言っておられるのです。このヘロデに対する御守りの翼は、今この取調べの時にも、イエスの沈黙の中で、差し伸べられています。ヘロデは「そんなものはいらぬ」と振りほどくのですがね。それがこの場面で透けて見える天からのまなざしです。

さてピラトとヘロデ、二人の悪者ですが、悪者とは言い切れない何か温かいものが差し向けられている気がしませんか。12 節に面白い記述があります。「この日、ヘロデとピラトは仲が良くなった。それまでは互いに敵対していたのである。」どうしてこのようなことをわざわざルカは書き残したのでしょうか。実は、この結託の出来事は詩編 2 編の言葉の成就だと、後にペトロが解釈している箇所が使徒言行録に出てきます。4 章 25~27 節です。二人の「団結」は詩編の預言成就として書き残す必要があったわけです。元々の詩編 2 編を読むと「地上の王」、「支配者」とあり、これらはヘロデとピラトのことだと解釈されたことがわかるのですが、少し先を読むと、このふたりのあわれな悪者の本質とおぼしき文言が書かれています。「我らは、枷をはずし、縄を切って投げ棄てよう」、これです。つまり、「神様はいらぬ、自分でやる!」、正義も偉業も自分の力で貫き達成できるということです。しかし、ピラトは正義を行おうとして潰され、ヘロデは偉業を成し遂げようと建てた神殿を潰されました。詩編 2 編によれば、この二人の支配者を神は天から見て笑われると書いてあります。

この二人のありさまは、イエスを十字架につけよと叫んだ民衆のありさまと同一視されていることが、使徒言行録の 3 章の 17 節で分かります。ペトロが民衆を前に説教した時の言葉です。「ところで、兄弟たち、あなたがたがあんなことをしてしまったのは、指導者たちと同様に無知のためであったと、私には分かっています。」そしてペトロは、神の計画のうちに、イエスはメシアとしての業を成し遂げ、復活して、「万物が新しくなる」(使徒 3:21) 希望を、私たちにも与えてくださったと語ります。ピラトやヘロデと同様に、民衆も、そしてわたしたちも、神様の御手を振りほどこうとします。目に見えているのはそのような私たちのものがきだけかもしれませんが。自分で何とかしなくちゃいけない。ちゃんと正義を行わなくちゃいけない。立派な偉業を成し遂げなくちゃいけない。けれども見えないところで差し伸べられている神様の御翼は、「枷をはずし、縄を切ろう」とする私たちのあがきよりも、結局は勝っていた。これがルカの伝えたかった歴史なのです。